シュリー・ハヌマーン、名前をもらう
『ラーマーヤナ』の物語より

シュリー・ハヌマーンは子どもの頃、アンジャナーの息子という意味のアンジャネーヤと呼ばれていました。これは彼の初めての冒険で、彼がシュリー・ハヌマーンとして知られることになったいきさつの物語です。

アンジャネーヤは、両親であるアンジャナーとケーサリから、強靭（きょうじん）な力と決断力を受け継いでいました。大気の神、世界の大いなる息であるヴァーユは、彼を自分の息子のように愛し、彼が偉大な運命を全うすることを知っていました。 ヴァーユは、アンジャネーヤに自分が持つ神々しい力のいくつかを与え、誕生以来ずっと守ってきました。

神聖なる素質に恵まれながら、アンジャネーヤは自分が特別であることにまったく気づきませんでした。キシュキンダーの近くに住み、何時間も木から木へと飛び移り、森に住む動物を追いかけ、 他の子ザルたちとかくれんぼをして遊んでいました。彼は常に生き生きとしたエネルギーに満たされていました。

ある朝、アンジャネーヤはあまりの空腹に目を覚まし、何か食べるものはないかと小屋の外に出ました。彼は、東の地平線上にある森の上から太陽が昇って来るのを見つけました。木々に掛かる輝く赤い球体を、彼は驚きをもって見つめました。それは、まるで熟れたみずみずしい果実のように見えました。アンジャネーヤは好奇心をそそられました。この光る赤い果物はどんな味がするだろう、と考えました。マンゴー、それとも甘いスイカみたいな味だろうか。彼はますますお腹がすいてきたので、自分で行って確かめようと決めました。

彼は、巨大な赤い果実にねらいを定めて完全に集中して空に飛び上がりました。彼は空中に舞い上がり、太陽を目がけて全速力で空を飛んで行きました。空を高く高く上っていくと、下の方で朝日に輝く山や川、森や町はどんどん小さくなっていきました。アンジャネーヤは下の世界や周りの広く荘厳な空を気にも留めず、果物と思っている太陽しか目に入りませんでした。

太陽の神、スーリャは、子ザルが猛烈な速さで近づいてくるのに当惑し、少し危険を感じました。

「インドラ神よ」と、天の王に呼び掛けました。「助けてくれないか」

インドラ神は自分の庭を穏やかに散歩していましたが、スーリャが助けを求める叫びを聞いて興味を引かれました。「スーリャにいったい何の助けが必要なのだろう」と考えました。「彼に近づくものは何だって焼き尽くせるだろうに」。彼は大きな白象のアイーラヴァタを呼んでその上に乗ると、太陽に向かって飛びました。

子ザルが手を伸ばして空から太陽をもぎ取ろうとしているのを見て驚き、インドラ神は大声で叫びました。「やめなさい！　おまえは誰だ。何をしようとしているのだ」

太陽に向かってまっしぐらに飛びながら、アンジャネーヤは答えました。「僕はケーサリとアンジャナーの息子のアンジャネーヤだ。僕はこの美しい黄金の果物を食べたいのだ」

インドラ神は、最初は面白がって呼び掛けました。「何だって。あれは果物ではない。彼はスーリャ神といって、地上に光と生命を運ぶ者だ。すぐに地上の住みかに戻りなさい」

自分の目的に気を奪われ、アンジャネーヤはインドラ神を無視して、灼熱にまったく動じず、太陽に向けて手を伸ばしました。インドラ神は今度は心配になりました。天界の安定が脅かされようとしていました。ためらうことなく、インドラ神が巨大な稲妻ヴァジラをアンジャネーヤに向けて投げ付けると、それは彼の顎に命中しました。アンジャネーヤはその一撃で失神し、くるくる回って落ちて行きました。彼は地面に向かって下へ下へ、らせんを描いて砂漠に落ち、意識を失ったまま倒れていました。

直観に促された風の神ヴァーユは砂漠に導かれ、すぐに傷ついた子どもを見いだしました。彼は紛れもないインドラの稲妻の傷痕をアンジャネーヤの顔に見ると、天に拳を振り上げて激怒して叫びました。「インドラ、子どもの顎の傷はおまえの仕業だな。よくも私の愛する子どもを傷つけたものだ。この子が誰か知らないのか。私はこの地上を去って再び戻ることはないだろう」

泣きながら、ヴァーユはアンジャネーヤのぐったりした体をそっと腕に抱きました。彼はそよ風や空気の流れを呼び集めて、地下の領域であるパーターラローカに飛んで行きました。そこで木の葉と柔らかい草で寝床を作り、そっとアンジャネーヤを寝かせて、彼の手を握りながら癒やしの歌を歌いました。

ヴァーユ神が去ってから、地上には空気の動きが無くなりました。木の葉はさらさらと音を立てることが無くなり、田んぼの稲穂がゆらゆらすることもありません。湖や川にはさざ波も立たず、空気はよどんで嫌な臭いがしました。雨も降らず雲も湧きません。草は枯れ、火はぶつぶつ音を立てるだけで、消えてしまいます。動物はその場に横になり、食べる元気もありません。人々は呼吸をするのに精一杯です。

創造主であるブラフマ神は、地上の状況を見て非常に驚きました。彼は神々を呼び集めました。維持と保護の神であるヴィシュヌ、太陽の神であるスーリャ、天界の神であるインドラです。

「インドラよ、あなたの行いはあまりにも軽率だった」と、ブラフマ神はきつく言いました。「暴力を使う代わりに説得することだってできた。彼はほんの子どもなのだ」

「そう、それに彼には果たすべき大切な役割がある」と、ヴィシュヌ神は言いました。「私はこの世にアヨーデャーの王子、ラーマ神として生まれた。この子どもは、地上に光を取り戻すという私の使命を助けるだろう」

ブラフマ神はもう一度言いました。「ヴァーユのいる場所に行こう。インドラは仲直りをしたほうがよいし、私たちは全員で、あの神聖な子どもに祝福をささげることができる」

その瞬間、思いよりも速く、 ブラフマ神と神々は、 ヴァーユがアンジャネーヤのそばに座っているパーターラローカの洞窟の外に立っていました。

「偉大な風の神よ、私たちはおわびをするために、そして再び地上に祝福をくださるようお願いするために参りました。どうか私にその子どもを治させてください」と、ブラフマ神は気持ちを込めて言いました。

ヴァーユが洞窟から出て来ると、顔には涙の跡が付いていました。そしてその集団を警戒して見ました。

「許してください。私がその子どもを傷つけました」。インドラ神は心を込めて言いました。

ヴァーユはインドラ神を厳しく見つめましたが、一言も発しませんでした。かすかにうなずくと、中に入るように示しました。

ブラフマ神は意識の無い子どもの足元に立ち、偉大な腕を子どもの上に掲げ、彼の力で包むと言いました。「今日この日から、どのような武器もおまえを傷つけることはできないだろう。おまえの身体は稲妻のように強く不死身になるだろう。おまえはまた、自分の意志で自由に姿を変えることができるだろう。そしてどこにでも行きたい所に旅することができるだろう」

アンジャネーヤは目を開けて起き上がると、あたりをしきりに眺めました。彼の身体は前よりもっと頑丈でしたが、顎にはインドラの稲妻の痕がまだ残っていました。

ブラフマは彼に優しくほほ笑んで言いました。「おまえはこれからシュリー・ハヌマーン、壊れた顎の持ち主と呼ばれるだろう」

「シュリー・ハヌマーン」と、ほほ笑みながらヴァーユは言いました。「良い名前だ」

「シュリー・ハヌマーン、おまえを傷つけて悪かった」と、インドラ神は言いました。「今日からおまえは望むだけ生きるだろう。おまえはチランジーヴァ、不滅なのだ」

ヴィシュヌ神は子どものところへ歩み寄り、彼の胸に優しく触れました。絶対に消えない不滅の炎を点火したのです。「おまえは神の偉大な信奉者になるだろう」と、愛を込めて言いました。

最後にスーリャ神が前に出て、ハヌマーンの手を握ると言いました。「おまえは若い。ハヌマーンよ、そして多くのことを学ばなくてはならない。私はおまえの師になろう。私が持つあらゆる知識と英知を、おまえに分け与えよう」

「ありがとうございます、スーリャ神。私を許してください。私はこの世界の偉大な光を果物と間違えました。私はあなたの生徒となることを光栄に思います。そしてあなたから学ぶことに飢えています」と、ハヌマーンはいたずらっぽく笑って言いました。

皆、笑いました。「偉大な神々よ 、皆さんの祝福をありがとうございます」と、ヴァーユは言いました。私は地上に戻って大地を育みましょう。皆さんを祝宴にご招待します」

風のように速やかに、神々とシュリー・ハヌマーンは森に帰りました。アンジャナーとケーサリは息子に再び会えて大喜びでした。太陽が西の空に沈みかけ、黄金の輝きをそれぞれの顔に映しながら、彼らは甘美な果実とネクター、熟した豆や種のご馳走を楽しみました。

次の日、シュリー・ハヌマーンはスーリャ神に導かれて、英知に向かう旅を始めました。日ごとに彼はより強く、より賢明になっていきました。やがて彼は、運命を全うしてラーマ神に仕えるまでになりました。

***

『ラーマーヤナ』は賢人ヴァールミーキによって創作された叙事詩で、ヴィシュヌ神の生まれ変わりであるラーマ神の物語を述べています。また、『マハーバーラタ』と共にインドの最も偉大な文学の一つであると考えられています。

© SYDA Foundation. 著作権所有。